

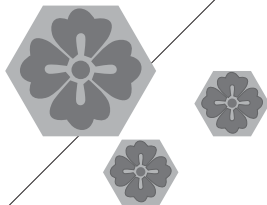
大岡忠相



改めて特別任務を命ぜられる

作家

童門 冬二



ややこしい給与の増額

大岡忠相が新しく任命された寺社奉行は、必ず奏者番（そうしゃばん）を兼務することになっている。というよりも、この兼職は奏者番のほう

が主務であって、寺社奉行はそのつけたりのようなところがあった。というのは、奏者番の資格は必ず大名であり、そのために寺社奉行も大名でなければいけないという仕組みになっていた。

奏者番というのはその名のとおり、「將軍への伝言やその指示の下付^{かふ}」が仕事だ。

とくにこの仕事がよくこばれたのは、各大名から將軍への献上物の品名や数量、あるいはその特性などを報告し、同時に將軍の受けとめ方を伝えるという役割を負っていた。

さらにいえば、將軍は大名が献じた金品を全部自分が収めてしまうのではなく、

「だれだれには、だれだれからきたその品物を渡すように」

といって献上物を分与する。なか

なか旨味のある仕事であった。楽しみもある。

したがって、寺社奉行の役所は奏者番の役所が兼ねていた。というよりも、奏者番の役所が主であって、実際にいえば寺社奉行の役所はない。これが、大岡が寺社奉行に任命されたときに、ひと悶着を起こす原因になる。

大岡忠相もすでに町奉行に命ぜられて十数年経つ。遠い山田で奉行にいたときは違って、江戸城内におけるポストのあり方や、あるいはそれにまつわるゴタゴタしたつまらない習わしなども十分知っていた。そこで吉宗が、

「寺社奉行に任命する」

といったときもこのへんの扱いのややこしさがあるので思わず、

「寺社奉行というのは、大名の職責ではございませんか」

ときいたのである。もちろん吉宗もそのことは知っていた。奏者番連中を相手にしているときに、かれら





がすべて寺社奉行を兼務していることも知っている。吉宗は答えた。

「だから、そのほうを大名にしてやるというのだ」

「は？」

唐突なことなので大岡は眼を大きく開いて吉宗をみかえした。吉宗は笑っていた。

「ただし、すぐ大名にはできぬ。おまえも知ってのとおり幕府内のしき

たりというのはなかなか厄介なものだ。壁のように厚い。そこで、とりあえずはおまえを大名格にするということだ」

「は？」

大岡にはまだ話が読めない。吉宗の脇には老中の松平乗邑（のりさと）と側用人の加納久道がいた。松平は大岡と仲のよかった老中水野忠之が罷免された後、筆頭にのし上った人

物である。油断はできない。しかし

側用人の加納のほうは古くからの馴染みで、なにかにつけて大岡のためをはからつてくれる好意的な人物だ。

吉宗がふたりに視線を走らせると、加納が松平の了解を得て話し出した。

「大岡、足し高という制度があるだろう？」ときいた。

「はい」

大岡はうなずく。加納はつづけた。

「当面、その足し高をおまえにも適用するということだ」

「は」

大岡はだんだん頭の中がこんがらがってくるのをおぼえた。落ち着いて加納殿の話をきけ、と自分で自分をたしなめた。加納は説明した。

「足し高というのは、その役職に家禄が満たない場合には、不足分を埋めるという制度だ。だから、寺社奉行はたしかに大名でなければならぬいから、大岡の不足する禄高を足し高で埋めるということだ」

「ああ、そういうことでございますか」

大岡は納得した。吉宗が口を挟んだ。

「ややこしくてわしもなかなか理解できなかったが、大岡、いまのおま



えの家の食禄は四千石だそうだな」

「さようでございます」

「この際二千石加増してやる。しかし六千石ではまだ四千石足りない。そこで一万石の大名にするために、四千石を足し高として当面与えるということだ。いづれ機会をみて食禄に加えてやる」

「これは、誠に恐れ入ります」

納得して大岡は平伏した。ただ大岡はさつきから、

(随分様子が違うな)

と思いはじめていた。様子が違うというのは、大岡は寺社奉行に任命されたことはいわゆる、

「敬遠人事だ」

と思っていたからである。敬遠人

早トリだった状況分析

大岡がそう思ったのはムリもない。それはいままで二人三脚で一方は老中筆頭という役職でありながらなにかにつけて大岡をかばい、また大岡のために便宜をはかってくれた老中筆頭水野忠之が、突然罷免されたからである。

事というのは、敬して遠ざけるという意味で職位のランクアップをはかるが、同時に管理中枢機能からはずしてしまおうということだ。

したがって大岡にすれば、寺社奉行に任命されるということはいままでのような用い方をされるのではなく、吉宗の改革における広告塔の役割が終わり、あるいは広告塔の役目が果たせなくなったので邪魔になった、という受けとめ方をしていたのである。

邪魔になった広告塔は障害物ではない。どこかへ片づけなければ目障りだ。そこで大岡も目障りな障害物として、どこかへ始末されると思いこんだのである。



したがってまわりからみれば、「二人三脚の一方がこけたのだから、当然もう一方もこけるはずだ」とみている。江戸城の連中はいま、「大岡様がこけるのはいったいいつだろう?」

と視線を集めている。江戸城内で

は人事上における他人の不幸をみるのが大好きだ。失脚者に対してはよってたかつて石をぶつける。つまり、「水に落ちた犬は石で打て」

という慣習が依然として存在していた。大岡は覚悟していた。

(水野様が罷免された以上、自分もこのまますむわけがない)

と思っていたからである。ところがきょうの話具合ではどうも違う。大岡はしだいに気づいた。

(上様(吉宗)にとって、水野様とわたしの扱いにはどうも差があるようだ)

という気がしてきたからである。それはいま話に出ている「大名クラスの扱いをする」ということでもわかった。大名クラスの扱いをするというのなら、そのことだけを辞令に書いて出せばいい。しかし吉宗は違った。

「大名は、一万石以上の収入を保障する。いまのおまえは四千石だ。そこで一挙に六千石増やすわけにはいかないの、当面二千石を増加しあとの四千石は足し高という制度を活用して与える」

ということである。話はわかったが、大岡はそうなると今度はまた別



な心配をした。

（上様は、自分に特別な任務を与えるのではないか？）

と思いはじめた。いま市中で起こっている米屋への打ち壊し騒ぎは、大岡は、

「すべて自分の責任だ」

と思っている。そしてそれが老中の水野罷免につながったといえないことはない。

「水野様が罷免されたのも自分のせいだ」

という責任を感じている。早くいえば米価政策を間違えたからあんな結果を生んだのだ。

そういうきもちは日増しに大岡の胸の中で大きくなっていた。

「大名並にしてやるといふ話はわかったか？」

吉宗が薄い笑いを浮かべながら大

岡にきいた。大岡は頭を下げた。

「ご配慮のほど、なんともお礼の申し上げようもございません」

「固くなるな。話はこれからだ」

吉宗はそういった。大岡は、いよいよくるな、と緊張した。

「大岡、改めてきくまでもないが、おまえはわしのこのたびの改革をどのように受けとめている？」

「はい」

一拍おいて大岡はまっすぐ吉宗をみかえしてこう答えた。

「ひとつは徳川幕府の勢威回復でございましょう。しかしそのためには、幕府そのものの財政力を強める必要がございます。したがって、財政再建が改革のもうひとつの目標でござ

います」

「そのとおりだ。だからこそ、江戸町奉行のおまえに市政だけではなく関東地方の米の増産を命じたのだ。それは理解しているな？」

「はい、よくわかっております」

「わしがこの座についてもっとも関心を持ち、緊張を怠らなかつたのは勘定所役人の動向だ。長年の積弊で、各地の代官どもがすべてその座に安住している。これを一新するために、わしは全国の代官の四分の一以上を



入れ替えた。新しい気風を吹きこむためだ。しかしまだまだそれが完全に一新されたとはいえぬ。わずかに、おまえが担当している関東地方、とくに武蔵野新田において、模範的な代官の仕事ぶりがみられるだけだ。そうだな？」

そういつて吉宗は脇の松平乗邑を振り返った。松平はうなずいた。その素直なうなずき方に大岡は奇異な

地方御用職

それを証明するのがおなじ江戸町奉行の稲生次郎左衛門の存在だ。稲生は水野忠之をみはなし、完全に松平乗邑に入れこんでいる。そのため大岡を敵視し、ことごとく仕事の邪魔をし、また足を引っ張った。その限りにおいては松平乗邑もおなじ眼で自分をみている、と大岡は信じこんできた。

しかしいまの反応は違う。松平乗邑の大岡をみる眼はむしろ好意的だ。吉宗の問いにうなずいた表情も柔らかい。大岡はなにがなんだかわからなくなってきた。

感を持った。これもまた大岡は、（松平様は、水野様と自分とをいっしょにみている）

と思っていたからである。松平乗邑は水野忠之に競争心を燃やしていた。そのときに江戸町奉行の大岡もいっしょに考え、早くいえば、

「大岡も自分の敵だ」
と黙っていたにちがいない。

老中松平の賛同を得て吉宗は前身を乗り出した。

「大岡、そこで改めてそのほうに命ずることがある」

「はい」

「いま町奉行のほかに命じている関東の地方御用（じかたごよう）の強化を命ず」

「はっ」

「おまえがさっきいったように、幕府の勢威を回復するといっても、財力の裏づけがなければ大名たちはいうことをきかない。ましてわしが將軍になったときに、あまりにも赤字



の多い幕府財政を嘆き、わしもいまは後悔しているが、恥辱をも顧みず全大名に上納金を命じた。こんなことは將軍職はじまって以来の恥ずかしいできごとである。しかし乗り切るためにはやむをえなかった。あの上納金によって、いまだにこの吉宗をバカにしている大名はたくさんいるはずだ。その恥も一日も早くすげたい。それには、やはり思い切った新田開発と年貢増収が必要だ。いまそれが頼りになるのは武蔵野新田だけだ。しかし絶望することなく、武蔵野新田を全国の模範として、代官どもに発破をかけたい。その役をおまえに命じたいのだ。そこでおまえを改めて『地方御用職』に命ずる。大名格として、全国の代官におまえ自身の勢威を及ぼしてもらいたい」
「・・・」

大岡は言葉を失った。こんな吉宗をみたのはじめてだ。それは吉宗が大岡に命ずるポストに対し、異常な熱意を持っているからだ。はつきりいえば、

「この役目は、大岡以外果たせない」というきもちを吉宗が持っているのである。そのきもちの底には大岡に対する絶大な信頼感があつた。そ



れが吉宗の言葉と表情、とくに眼からほとばしり出ていた。大岡の胸は熱くなった。そして、
 (わたしはいままでいっただいなにを
 考えていたのだ?)
 と恥ずかしくなった。片時でも吉
 宗の信頼感を疑ったことを後悔した。
 (水野様と自分とはまったく別だっ
 たのだ)

ということを改めて感じた。吉宗

がきいた。

「どうだ? やってくれるか」

「もちろんでございます」

大岡は顔を上げて吉宗にピタリと視線を合わせた。

「そこまでの上様のご信頼、身にあ
 まる冥加でございます。身を賭し
 てお役を果たさせていただきます」
 「そういつてくれると思った。松平、
 よかったな?」

吉宗は松平にそう声をかけた。松
 平もうれしそうな表情になり、

「大岡、よろしく頼む」

と告げた。長年のわだかまりがい
 つべんに胸の中で溶けた。松平乗
 邑も単なる出世主義者ではない。稲生
 とは違う。やはり幕府のことを考え、
 この国のことを考えている。そして
 もっといえば、吉宗の立場をよく考
 えているのだ。場合によっては水野
 忠之以上に松平乗邑のほうがその思
 いを熱くしているかもしれない。

吉宗の居室内に漂う熱が、座にい
 る人びとを熱く覆った。松平がいっ
 た。

「いままでは、本来勘定所の仕事で
 あることを町奉行であるおぬしが担
 当して、仕事運びのうえでもいろいろ
 とさし障りがあつたのに違いない。
 そのさし障りについては、そのすべて
 とはいわないまでもこの松平が責任
 を持つて壁を除く。そのつもりで心
 を打ちこんでもらいたい」

誠実さの溢れる松平の言葉だ。大
 岡は松平に向かって深く一礼した。

「どうぞ、よしなにお願い申し上げます」

「大岡、よかったな」

側用人の加納も声をかけた。(続)